

平成 22 年 5 月 19 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720086
 研究課題名（和文） 広東語の談話モダリティの研究 意味機能と音声の相関に着目して
 研究課題名（英文） A study of discourse modality in Cantonese --- particularly on the correlation between functions and phonetic features

研究代表者

飯田 真紀（IIDA MAKI）
 北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
 研究者番号：50401427

研究成果の概要（和文）：

本研究は広東語の談話活動におけるモダリティ（話し手の発話内容をめぐる主観的態度）の主な表現形式として文末助詞を取り上げ、いくつかの形式に見られる多機能化の様相を明らかにし、また、音声形態と意味機能との相関を探った。具体的には、本来、別な機能を表す形式が、機能拡張を経て談話的機能を担うようになるケースを分析したが、いずれの場合も元の語彙の意味や機能が文末助詞の談話的機能に引き継がれていることが明らかにされた。また、発話伝達方略に関わる文末助詞においては、声調や韻母が一定の意味機能を担っている可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The focus of this research project lies in the sentence final particles as the major forms to express modality in discourse of Cantonese. (Modality here refers to the subjective attitudes of a speaker concerning the contents of his/her utterance.) In this study we revealed various aspects of the polyfunctionalization of some sentence final particles and explored the correlation between the phonetic forms and functions of such particles. Specifically, we analyzed the cases in which a certain linguistic form came to bear, through functional extension, another discourse function in addition to its original one. We found out that in each case the original lexical meaning or function was also preserved in the discourse function of the particle. In addition, we suggested that tones and finals might bear certain kinds of meaning/function in the case of the sentence final particles which specifically deal with a message-conveying strategy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	1,000,000	0	1,000,000
20年度	800,000	240,000	1,040,000
21年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	420,000	2,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：広東語 中国語 モダリティ 文末助詞 談話 音声 多機能化

1. 研究開始当初の背景

広東語は中国語方言の中でもとりわけ多くの文末助詞を持つことで知られており、その意味機能をめぐってこれまで様々な議論が展開されてきた。そのような中、代表者による過去の研究では、広東語の文末助詞は、個々の形式がパラディグマティックな関係とシンタグマティックな関係を構成する、1つの体系性を有した文法カテゴリーであり、談話における発話内容(ないし命題)をめぐる話し手の主観的な態度を表すモダリティの表示を行うものであることが改めて明らかにされた。

しかしながら、個々の形式の詳細な意味機能分析を進めるにつれ、いくつかの文末助詞は多様な意味機能を持ち多機能的事であることがわかってきた。そのため、広東語の談話におけるモダリティの様相をよりの確に捉えるためには、これらの文末助詞の多機能性の解明を行う必要があるとの考えに至った。一方で、文末助詞の音声形態に着目すると、ある特定の声調や韻母がよく用いられ、音声的特徴と意味機能との間に何らかの相関性があることが予見されたため、この点についてのさらなる考察が俟たれていた。

2. 研究の目的

このようなことから、本研究では談話モダリティの主な担い手である文末助詞を取り上げて意味機能分析を行い、いくつかの形式については多機能化の諸相を明らかにし、また、音声形態と意味機能との相関性について踏み込んだ考察を行うことを目的とした。

これにより、広東語における談話モダリティの言語化に関する一般的規則の発見を導き出すほか、広く一般言語学的に重要な意義があると思われる以下のような研究成果が期待された。

(1) 命題レベルから談話レベルへの機能拡張といった、多機能化に関する理論の精緻化へ向けて有力な手がかりを提供する。

(2) 談話モダリティを表す言語形式に見られる、意味機能と音声形態との相関関係について、新たな知見を提供する。

3. 研究の方法

(1) 関連先行研究の文献・知見収集

談話モダリティや文法化・多機能化に関する

関連文献を収集するとともに、学会発表、その他様々な形式の学術討議を通じて、関連分野における最新の研究成果や知見を得た。

(2) 母語話者への聞き取り調査と電子化テキストからの実例収集

国内に居住する広東語母語話者への聞き取り調査、ならびに広東語圏での現地調査を通じて言語データの収集を行った。

それと平行して、電子化された広東語文字資料からも言語データを収集した。電子化資料は実際の談話活動を反映すると見られる広東語口語小説・脚本などの書籍 20 数点を、データ入力会社に委託して作成したものである。

(3) 分析・考察と成果発表

(1)と(2)に基づき、いくつかの文末助詞の意味機能分析と考察を行い、随時その成果を学会での口頭発表ないしは論文発表の形で報告した。

4. 研究成果

(1) まずは広東語の談話モダリティの主要な担い手である文末助詞という文法カテゴリーの体系的再整理を行った。文末助詞は「文が表す表現内容(=命題)をめぐって、発話場における種々の要請に動機付けられて行う、話し手の事態認識の仕方及び聞き手への発話伝達の仕方の表し分けを担う文法カテゴリー」であり、意味機能の異なる3つの下類によって構成された階層的な構造を持つ。すなわち、命題のすぐ後に生起する2つの類は事態認識という命題寄りの表現態度を表し、命題から最も遠い、すなわち文の最も外側の位置に来る類は命題をめぐる発話伝達方略という聞き手寄りの表現態度の表示を担う。さらに、事態認識に関わる2類のうち、命題そのものの性質を規定する類と、話し手の立場から把握された命題の姿を描く類とが区別され、前者は命題の直後、後者はその外側に位置する。そして、ここで見られる<客体寄り>・<主体寄り>という意味的対立と構造上の位置関係との相関は、アスペクト、方向補語といった広東語における他の文法カテゴリーにも共通して見られる一般性の高いものであることが指摘された。

(2)次に、上述の発話伝達方略に関わる類の文末助詞の中から a3 と wo3 を取り上げ、その意味機能が発話の(一方的)発信であることを導き出し、両者の違いはそれが付く発話の種類が、a3 は<声>、wo3 は<情報>であるという、談話論的指標を用いた分析を提示した。さらにこれらと音声形態上類似する別の文末助詞 a4、wo4、a5、wo5 の分析にも<声>vs.<情報>という指標の対立を適用し、各形式の意味機能はこの対立と<取り込み>・<解釈案提示>という指標との組み合わせにより説明できることを論じた。

これにより、発話伝達方略に関わる文末助詞においては、声調(第3声、第4声、第5声など)や韻母(a、o など)が一定の意味機能を担っている可能性があることを示唆した。特に、声調の現れ方については、日本語の文末形式にかぶさる文末イントネーションの起こり方と類似する点が見られ、今後の探求に向けて興味深い課題を提示した。

(3)次に、命題レベルから発話/談話レベルへの文法化・多機能化を見せるいくつかの文末助詞を事例として取り上げ、以下のような分析・考察を行った。

①文末助詞“添”の多機能性分析

文末助詞として命題部分の直後に生起する“添”は、本来動詞“添”(「追加する」)から文法化されたものであるが、文末助詞としても多様な機能を持つ。そこで、その文法化・多機能化のプロセスを以下のようなものであると想定した。

[1]動詞“添”が<動作レベル>における「数量の追加」を表すだけでなく<叙述レベル>において「事態の追加」を表す機能をも獲得した。

[2]“添”はさらに<心理レベル>における「予定外事態発生」を表す機能を獲得するに至ったのであるが、この「予定外事態発生」というのはまさに「追加する」という動詞としての意味特徴を引き継いだものである。

[3]さらに、従来指摘はないが、“添”は命令・禁止文において聞き手への念押しを表す機能をも獲得した。なお、これについては「追加」機能が<言語行為レベル>へと拡張した結果「要請の追加」という対人的な談話モダリティ機能を獲得するに至ったものであるとの分析を提示した。

②文末助詞“嘅”への多機能化メカニズム考察

文末助詞としてモダリティ機能を表す“嘅”(具体的な音声形態は後続の文末助詞の影響によって異なる)に着目し、その意味機能を明らかにするとともに、それが構造助詞の“嘅”「~の」からいかなる意味機能特徴を引き継いでいるかを論じた。あわせて、構

造助詞の“嘅”が見せるその他の機能拡張の諸相に着目し、その制約と方向性について中国語標準語と比較対照しつつ広東語の文法体系に照らして説明を試みた。

具体的には以下の通りである。すなわち、先行研究が示すように、広東語では構造助詞“嘅”を用いた連体修飾構造“M 嘅 N”「M の N/M という属性の N」は専ら総称的事物を表すのに使われ、特定の事物を表すには類別詞(CL)を用いた別の構造“M(+指示詞)+CL+N”が使われる。そのため、連体修飾構造“M 嘅 N”及びそこから中心語名詞が落ちた名詞化構造“M 嘅”「M の」はともに強い総称性を示す。このような構造助詞“嘅”が持つ意味機能特徴は“嘅”のその後の機能拡張における制約や方向性を次のように特徴付ける。

[1]“S(係)V 嘅 O”構文の欠如：標準語には特定の既然行為の属性措定を行う判断文として構造助詞“的”「~の」を用いた“S(是)V 的 O”という構文が存在するが、同様の構文は広東語では成立しない。これは“M 嘅 N”構文が総称事物を表すものであり、標準語と異なり、特定事物の属性措定を行う判断文としてそもそも機能しないため、特定動作行為の属性措定へと機能拡張が起こる基盤がなかったからであると考えられる。

[2]条件節標識としての機能獲得：総称文は意味論的に条件文と類似している。ゆえに“M 嘅”を主語(主題)においた総称文が次第に再分析を受け“嘅”そのものが条件節標識であると解されるようになった。

[3]命題一般化を表す文末モダリティ助詞の機能獲得：“文+嘅”のように文末に置かれる“嘅”は、文が表す命題から一回性・個別性を捨象し、一般化・総称化する機能を果たすようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①飯田真紀、広東語の条件節標識“嘅”、メディア・コミュニケーション研究、57号、査読有、2009、21-33頁
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/bulletin/MCS>

②飯田真紀、広東語の構造助詞“嘅”の機能拡張の諸相、現代中国語研究、第11期、査読有、2009、128-137頁

③飯田真紀、広東語の“添”の文法化・機能拡張、中国言語文化論叢、第10集、査読有、2008、22-46頁

④飯田真紀、粵語句末助詞的體系、第十屆國際粵方言研討會論文集、査読有、2007、385-393頁

⑤飯田真紀、広東語における発話伝達の文末

モダリティ助詞、中国語学、254号、査読有、
2007、143-163頁

〔学会発表〕（計2件）

①飯田真紀、粵語結構助詞「嘅」向條件分句
標記轉變的功能擴張、第十三屆國際粵方言研
討會、2008年12月18日

②飯田真紀、広東語の連体修飾構造及び構造
助詞“嘅”の機能拡張の諸相、日本中国語学
会第58回全国大会、2008年10月26日

〔図書〕（計1件）

①飯田真紀、白水社、ニューエクスプレス
広東語、2010、148頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯田 真紀 (IIDA MAKI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニ
ケーション研究院・准教授

研究者番号：50401427